

《編集後記》

『日蓮学』第七号をお届けいたします。今号は身延山開創七五〇周年を記念しての特別号として、論文六編、資料一編、報告一編を掲載いたしました。

望月真澄先生の「日蓮の身延入山・甲斐国巡教・身延山開闢に関する記述―日蓮伝記本・地誌類・紀行文を素材として―」は、日蓮聖人の身延入山・甲斐国巡教・身延山開闢の三点がどのように受け止められ、寺院由緒として定着していったかについて、日蓮伝記本、地誌類、紀行文・案内記の記述の分類・比較を通して検討した論文です。

鈴木隆泰先生の「女人成仏―および女身成仏―」は、仏教における女性の扱いを「1. 女性一般の場合／2. 優婆夷の場合／3. 比丘尼の場合／4. 菩薩、ブツダの場合／5. 日蓮遺文」という五項目の観点から考察した論文です。

ジャクリン・ストーン先生の「Is There Still Buddhism Outside Japan? : Some Thirteenth-Century Perspectives」は、日本仏教における日本観、すなわち辺境意識と中心意識という一見相矛盾する二つの perspective についての論文です。特に十二世紀後半―十三世紀に注視し、明恵の天竺留学断念の逸話を軸としながら覚憲、鴨長明、栄西、日蓮聖人らの著作の検討などを通じて考究しておられます。

横殿伴子先生の「チベットにおける『千手千眼大悲心陀羅尼経』の受容と展開―『マニ・カンブン』編纂の意図をめぐって―」は、チベット土着の仏典『マニ・カンブン』について、サキャ宗とゲルク宗が出版した木版印刷版にのみ『千手千眼大悲心陀羅尼経』が挿入されている点に着目し、その挿入の意義・思想的背景を検討し、同書の編纂意図を考究した論文です（なお本論文は、令和3年度仏教学術振興会助成金「SAT大蔵経を直接用いた研究」の成果として提出された論文を修正・加筆したものと なります）。

拙稿「虚構」そして「想像的」なるもの―文学としての大乗―は、ハーバード大学で二〇二三年三月一九日に開催されたワーク・ショップ“Expanding the Range of Japanese Buddhist / Religious Studies”での発表を基とした論文で、大乘経典を「文学」として捉える試みについて考究しています。

金炳坤先生の「出三訳法華経序記集(中)」は、僧祐『出三蔵記集』所収の「正法華経記」「正法華経後記」、および『添品妙法蓮華経』経首に置かれる「添品妙法蓮華経序」と『妙法蓮華経』の経首に置かれる道宣「妙法蓮華経弘伝序」という四種のテクストについて、関連の諸本と対校しての校注と私訳を付した資料です。

また今号は、令和二年以来久々の実地となった本研究所の国際交流事業「ラオス世界遺産修復プロジェクト」(令和五年二月十七日～三月十一日)の成果を伝える論文と報告を掲載しております。

まずジル・エマ・ストロースマン先生「2023 Research: Alternatives to Khanouk II」は、漆工材料「カモク」についての研究論文です。ジル先生は「カモク」の研究を第一人者として年来続けており、本論文はその最新の成果を示すものです。

拙稿「ラオスの神仏 ルアンパバーン地区の寺院視察を基に」は、ラオス人民共和国のルアンパバーン世界遺産地域の寺院視察の模様と、そこで得られた知見をまとめた報告となります。

末筆ですが、国際的なレベルでの日蓮研究の今後いっそうの発展、そしてその発展の一翼を本研究所が担えることを心より願っています、第七号の編集後記といたします。(岡田文弘記)